

令和6年度第2回周南市立図書館協議会議事録

日 時 令和7年1月15日(水) 10:00~11:15

場 所 周南市立新南陽図書館 視聴覚室

出席者 協議会委員(10名)

渡部 明 委員長、石丸 敬子 副委員長

佐藤 淳 委員、国重 義久 委員、山本 邦子 委員、福岡 宏子 委員

平岡 正夫 委員、永野 節子 委員、渡辺 真弓 委員、坂本 浩 委員

事務局(11名)

中央図書館長、新南陽図書館長 福川図書館長、熊毛図書館長、鹿野図書館長

徳山駅前図書館長、徳山駅前図書館館長補佐、徳山駅前図書館担当

中央図書館館長補佐、中央図書館管理担当係長、中央図書館普及担当係長

- 議 題 1 第四次周南市子ども読書活動推進計画について
2 意見交換

議事録

(10:00 開会 委員及び事務局自己紹介)

1 第四次周南市子ども読書活動推進計画について

事務局より説明

質疑

(委員)「読書が好きな子100%を目指して」というスローガンはどこから出たのか?

(事務局)100%、すなわちすべての子どもたち、という意味合いで表現させていただいた。

(委員)市民センターに貸出図書があるとのことだが、その目標値として情報発信が掲げられている。PRを進めてはどうか。

(事務局)市民センター文庫は、中央図書館から予算配当はしているが、基本的な管理は市民センターにお願いしている。今回、目標値に掲げ、地域だよりなどでPRをしていただき、利用促進につなげていきたい。

(委員)自分の住んでいるところは、市民センター文庫が充実しており、郷土史家さんからの寄贈もあり、主事が一生懸命してくれている。しかし、高齢化が進んでおり、ただ本を読むだけでなく、活用方法も考えたい。

(事務局)子ども読書活動とは少し離れるが、高齢化ということでは、最近、高齢者向けの紙芝居も発行されているので、これを活用したらどうか。

(委員)ブックスタートや読み聞かせなどが掲げられているが、絵本から先に進まない、という印象がある。子どもが成長するにつれて、読み聞かせから読み物、専門書とつないでいく道筋が見えない。うちどくにしても、絵本ならできそうだが、親が読む本、小学生が読

む本は違う。同じ本でなくても、親が読書に親しんでいれば、子どもとの会話の中に自然と出てくる。もちろんうちどくも大事だが、それをどのように発展させるかが大事なのではないか。

(事務局) 計画で、「子どもの年齢や発達段階に応じて、子どもが読書に触れ、親しむことのできる機会を幅広く提供していく」としており、子どもの成長の段階に応じた環境を作り上げることは必要であるし、そのようなきっかけ作り、意識付けをすることも大事であると思う。

(委員長) 学校での取り組みはどうか？

(委員) 学校は苦勞している、というのが正直なところ。子どもの関心と大人の関心はちがうんだな、という印象がある。

(委員) この計画に書かれているような取り組みはしている。子どもたちのチャレンジ目標として、全校での目標数値を持っているが、昨年度からは電子図書館を利用した冊数も入れた。数値は下がらず、がんばっている。県の大会で話が出たが、学校図書館と公共図書館との連携は大事であること、地域、ボランティアとつながることは今までも取り組んでいることではあるが、さらに進めていけたらと思う。

(委員長) 策定委員会で、読書手帳についての議論が交わされたが、改めて説明を。

(事務局) 読書手帳はこれから小中学生への配布を進めていく。記録をすることで、読書の意識づけ、動機づけにしたい。図書館で借りた本はシールを出力し、貼り付けることもできるし、手帳なので、他で読んだ本や感想などいろいろなことが手書きで記入できる。これで読書のきっかけづくりになればよいし、先ほど出た、次の段階へ進む読書の流れを作る足がかりになれば、と思う。

(委員) うちどくとは？

(事務局) 計画の中に注釈もつけているが、「家庭読書」の略で、同じ本を読むことで、感想を話し合い共有することで、読書をしながら家族のふれあいを深めていく、という試みである。

(委員) うちどくコンテストとは？

(事務局) うちどくの様子を図書館にご提出いただき、表彰するもの。いかに家族で読書を楽しんでいるのか、というのを基準としている。

(委員) 計画を策定し、進めていくことについて、話が大きくなるが、管轄は文科省ということになるだろうが、普段どれだけ地域で頑張っても、お金がないということで必要なものが欠け落ちている。読書にしても、すぐに効果が現れるものではなく、長い年月を積み重ねて形成されるものなのに、待ってくれない。長い年月をかけて地域の環境、読書の環境をつくっていくのにお金はくれない。本当にこのような計画を地域で進めていくのであれば、文科省が地域の基礎に対してお金を出してほしい、と本当は言ってほしい。頭の片隅にでも環境を整えるものが足りていないことがわかったうえで進めていかないと、言葉だけで進めていく印象がある。もちろん、入口として進めていかなければならないのではあるが、その先にどのような環境を整えるかということは国、県、市すべてがやっていかなければならないことであるが、この基本が欠けているように思う。難しいかもしれないが、このへんがもっと突っ込めたらいいと思う。もちろん、地域が進めていくが、予算面も含め、もっと国がその旗振りをしてほしい、という文言が入れられたらいいな、と思った。

- (委員) 中学校の部活動が地域移行するというが、スポーツは聞くが、文化部はどうなのか。指導者はボランティアか。地域活動の中で、地域のお母さんたちが熱心に来られているが、その人たちが地域活動を支えると考えたいへんだな、と思う。
- (事務局) 地域の文化活動の中で、図書館としてどのように関わっていくべきなのか、ということを考えることも必要ではないか、と思う。
- (委員) 私の住んでいる地区は、文庫や子育てセンターなど、学校を含めて、地域の人が子どもを育てていこうという意識が強い地区のように思う。地区の子どもはよくあいさつをするし、子どもたちから教えられることも多い。学校で、地域の歴史についてお話することもあり、地域の史跡の探訪をするという取り組みもあるなど、地域の歴史を知って、先生と子どもが一体となって勉強しようという姿勢がある。こういった活動を読書につなげていけたら、と思う。
- (委員) 二十数年前に活動を立ちあげて、読み聞かせや図書コーナーの季節ごとの飾りつけをしている。読み聞かせを通じて、幼児から低学年へとつなげていると思っている。さらに小学生から中学生へとつなげていけたら、と思う。
- (委員) 継続的に年齢層にあわせた取組が必要であると思う。内容的にも当然内容もそれぞれに対応したものであり必要があると思う。
- (委員) 現在、図書館で活動しているが、若い人が入ってこない。今は共働きの人が多く、平日の昼間には来られないのが現実だが、若い親の世代が本を読むなりいろいろなことを考えていけば、子どもたちに勉強しなさい、これ読みなさいと言わなくても、自然にもの考える環境が整っていくと考えているので、働いている親御さんが何らかの方法で活字に関わることはできないか。大学生が図書館に関われば、そのお兄さんお姉さんと一緒になって高校生が交わっていける、関わっていける。このようにするために、公共図書館で何か知恵はないものか。現状、新しく入って来ると言っても高齢で、活動の期間が長期間続かない。公立図書館でそのような取組はできないものか。
- (事務局) 図書館としてはいろいろ模索しながら、可能なことは進めていきたい。今年から土日の休館をなくしたので、働いている人がわずかではあるが利用しやすくなったのではないかと、思う。
- (委員) 読書環境の整備について、学校にはいろいろな特性を持つ子どもがおり、例えば、目で本を読むことが苦手で、電子図書館の読み上げ機能を使って、耳からであれば本を読むことができる子どもがいる。そういった読書のバリアフリーも、今、実際に進んでおり、多様な方法で、読書に取り組むことができるようになった。
- (事務局) 読書バリアフリーの考え方で、いかなる人も読書に親しむことができる、という環境づくりが必要であり、その方法の一つとして、電子図書館において、文字の拡大、縮小、色黒反転、読み上げ機能など、今までの紙ベースの本と違ったアプローチができるものとなっている。こういったものを活用しつつ、読書環境を整えていきたい。

2 意見交換

- (委員) 自分の子どもが小さい頃は、学校で本を読む時間があつたと思うが、今はどうなのか。
- (委員) 小学校では、時間を取っている。読み聞かせもボランティアに来ていただいている。先日、幼稚園と交流を持った時、図書室で待っていただいたのだが、子どもたちが小学校

の本を見て、目を輝かせていた。発達段階に応じた、というのもあるが、子どもの見ると大人の見目がちがっており、提供する悩みどころである。

(委員) 定期的に時間をとったり、読書週間に合わせてたっぷり時間を取ったりしている。現在、小学校と中学校が同じ建屋にいたので、中学生が小学生に向けて読み聞かせをするなど、色々なアイデアを出してもらいながら取り組んでいる。

(委員) 子ども読書活動推進計画にも関係機関との連携は書かれているが、学校や大学はもとも読書に対して意識の高い人である。図書館は本を読むだけでなく、文献を検索したりする場所でもあり、そのような貴重なものがある。子どもだけでなく大人もこのように利用できる、もっと一般の人に示すべきではないか。

(事務局) 一般の方に対しては、ブックリサイクルなど、図書館に目を向けていただくことをしており、調べものをする場合の指針や手引きになるようなものを提供している。図書館を知っていただくための働きかけが重要である。

(委員) 大体同じ人が同じように使っている印象がある。来たことのない人でも、実際来ていただけたら図書館に対する理解も深まると思うので、行きたくなる図書館を目指すべきである。

(委員) テレビなどで情報を収集し、紹介されたものなどを図書館に行き調べてもらったりしている。これをほかの場所で紹介することにより、そこで図書館をアピールすることになり、図書館への興味を広げていくことになるのでは？

(事務局) PRや情報提供の方法はまだ考える余地が多くあるので、研究したい。

(委員) 古本市で子ども連れの方に、この本は古いけど、とてもいい本だよ、と勧めると、また来てくれて、本を選んでくれる。そのようなきっかけが、親や子どもに対して本への興味を深め、仲間につなげることも多くあると思う。

(事務局諸連絡 11:15 閉会)